

山に樹木を、海にマングローブを

植林によって地域の自立を支援する

いけ だ ひろ し
池田 広志 さん

物資の援助から人材育成まで国際支援の方法はさまざま。そのなかで植林活動は一見、地味で目立たない。しかし、池田広志さんは「遠回りに見えても、植林こそが国際支援のカギ」という。現地の人々を山村・漁村に定住させ、貧困を減らし、地球温暖化に歯止めをかける…。池田さんの植林活動は、途上国の総合的な環境改善を実現する手法として高い評価を受けている。



植林の大切さを子どもたちに語る池田さん

アジアの青年たちの情熱に魅せられて

日本が高い経済成長を誇っていた1960年代末、池田さんは、ある銀行の研修所の教官として、社員にかなり過酷な体験をさせて企業戦士を養成していた。そして、その仕事に疑問を抱くこともなかった。

あるとき、「財団法人オイスカ」の研修センターから「日本の社員教育」について講義してほしい、という依頼を受け、これ

が人生の転機になった。

オイスカは1961年に「物質と精神が調和した繁栄を築く」という理念を掲げて日本で発足したNGOで、アジアの国々から若者を集めて日本で研修を行っている。いわゆる“人材育成”である。その若者たちの熱い議論に池田さんは圧倒された。

「ぼくの国では農薬漬けの農業は許さない。自然と対話しながら収穫をあげる最先端の有機農法を広げたい」「私の国は援助に頼りすぎている。1日も早く

自立への道を開くことが必要だ」など、講義中も休み時間も、若者たちの口から語られるのは祖国への熱い思いだった。

「彼らに比べて自分は、会社の利益だけを考えた社員教育に没頭している。これでいいのか」。胸に沸き上がる思いを抑えられなかった。そして講義の最後の日、池田さんは若者たちにこう挨拶した。

「日本人は『アジアの多くの国はまだ開発途上国だ』といい気になっている人間が多い。でも、私自身はここで君たち

樹木が伐採され、丸裸になった山々が続く

森がよみがえり、オイスカ村の人口も増えた



に教えたことより、教わったことのほうが何倍も多かった。恥ずかしい限りです。ありがとう」

池田さんが「国際協力に人生を捧げよう」と決意して銀行を退社し、オイスカの開発団員になったのは、それから間もなくのことだった。

立ちはだかる 不毛の大地

日本で農業研修を受けて1971年からフィリピン・ミンダナオ島に派遣されたあと、池田さんの活動は順調に進んだ。実践的な農業知識が豊富なわけではなかったが、専業農家に生まれ、家業を手伝っていた当時の感覚がだんだんとよみがえってきた。現地の気候に合った有機農法の技術も開発して大学の講師に迎えられ、「ミンダナオ島を一大農業地帯に」と池田さんは学生たちに熱く語った。

しかし、いくら高度な農業技術があっても、どうにもならない問題があった。雨期には土石流や鉄砲水が頻発し、乾期には土地が干からびる不毛な自然環境である。土石流対策にダムも造られていたが、それも決壊した。

自然災害を心配せず、水を十分に引ける農地は限られる。そのほかの広大な不毛地帯は、農業技術だけでは手のつけようがない。肥沃な土地で成功してきた池田さんは暗然たる思いにとらわれた。

行き詰まりを打破するヒントは、村の古老の昔話のなかにあった。

「こんなことは昔はなかった。輸出入の木材の切り出しが盛んになってから、

ひどい土石流や鉄砲水が起きるようになった」。

別の村の住人も「ここはかつて豊かな農地だった。森林の切り出しが始まって、こんな状態になった」と話してくれた。

「いったい奥地の山はどうなっているのだろうか。思い立って池田さんは教子たちと登ってみた。

ふもとにはまだ小さな森林が残っている。ところが、そこを抜けると景色は一変した。山頂まで続く傾斜面には1本の木もなく、草が生い茂っているだけだった。荒涼たる光景が池田さんに語っていた。

森林があれば、大雨のときも大地に張った根が土砂の流出を防ぎ、土石流や鉄砲水は起きない。乾期も、森林の保水作用で地中にしみ込んだ水が大地を潤してくれる。その大切な森林が姿を消した。山のふもとの^{やくま}厄災は、いわば自然からの警告だ…。

池田さんはいう。

「木材の伐採で地元のカネが落ちる。それは大切なことだけど、伐採したら、新しい苗木を植えないと生態系が壊れてしまう。そんな単純なことがまったく無視されていたんです。あ然としました」

ジャングルの 再生をめざして

大学との契約が切れた1983年から、池田さんの新たなチャレンジが始まった。オイスカの研修センター近くの村に拠点をつくり、センターの卒業生とともに毎日、水牛の背中に苗木をのせ、



地元の若者たちが植林活動をリードしている

5キロの険しい山道を何往復もする活動が始まった。

苗木の種類にもこだわった。資材として活用する木なら、まっすぐに伸びて生産性の高い木だけを植えればいい。しかし、森の再生のためには混合林が欠かせない。池田さんは、かつてのジャングルをイメージしてマホガニー、ナラ、チーク、ジェミリーナ、アカシアマンギウム…など多様な樹木を植えていった。

これには周囲から「カネにならない雑木を植えるなんて、地元民の生活を無視している」と非難めいた声もあがった。

「この国のために、と思って全身全霊を打ち込んでいるのに、それを誤解する人たちがいる。仕方がないことですが、一時は全身の力が抜けちゃいました」と池田さんは苦笑する。

植林で新たな 地場産業も生まれる

そんな苦難を乗り越えて植林活動は続いた。そして、その広がりや池田さんの予想を超えて、新たな地場産業を各地に生み出している。

例えば、大地一面に生い茂って植林の



紙づくりセンター



封筒づくりも地元産業になっている



コゴソ草から紙をつくる人々

妨げになる「コゴン」という草がある。かつてはこれを刈り取るだけで大仕事だったが、コゴンが紙の原料になることがわかり、紙袋や封筒、カレンダーをつくる仕事が生まれた。国際ボランティア貯金の寄附金は、植林の苗代のほか、これらの紙製品を作る機材の購入費として活用されている。

また、桑の木を植えて、緑化とともに養蚕業にも力を入れている。養蚕は教材としても子どもたちに人気だ。「小さな虫が繭をつくり、それが人間の衣服になる。その営みを実感して子どもたちの目の色が変わり、小さい生き物も大切にしようになった」と池田さんは言う。

さらに、育った木々には「ニト」というツル植物がからむ。これを加工して小物入れや敷物などの工芸品が作られ、日本などで販売されている。もちろん、森の復活によって不毛地帯にも農業が広がり、トウモロコシや米が作れるようになった。

こうして生み出された技術は、環境と調和した技術という意味で「エコテック」と名づけられ、オイスカの重要な活動理念になっている。その中核拠点として、ミンダナオ島にはオイスカ・ミンダナオ国際学校が設立され、池田さんは同校の所長に就任している。

マングローブの海もよみがえった

一方、伐採によって破壊された山と同じように、海ではエビの養殖のためにマングローブが切られ、漁業が成り立たなくなっていた。ここでも池田さんはすぐにマングローブの植林に着手し、

マングローブの森が再生し、ヤシガニ捕りも復活した

この30年間で100メートル幅で約40キロにわたる広大な海岸にマングローブを復活させた。

これによって海岸にカニなどが戻り、その糞や腐葉を求めてプランクトンが集まり、かつてのようにヤシガニやイカや魚が獲れる豊かな海岸がよみがえった。

「こうして地元の人たちが漁業で生計を立てることができれば、定住者が増える。そうすると都市の貧困地区に流れる若者もいなくなる。そのうえ、緑化で地球温暖化の対策にもつながるわけだから、植林活動はまさに理想的な国際支援の手法ですよ」

そう語る池田さんの願い通りに、植林活動によって各地に新しい村も生まれている。植林活動を最初に始めた山奥の場所は、今では80世帯・500人が暮らす村になっている。

こうした植林活動は、当初は地元の壮年・青年によって展開されていたが、今の活動の中核になっているのは、じつは各地の学校の子どもたちだ。

これは「子供の森」計画と名づけられたプロジェクトで、学校の敷地や隣接地に子どもたちが自分の手で苗木を植え、育てていく活動として1991年にスタート。最初はミンダナオ島の小学校など20校で始まったが、今ではアジア・太平洋中心に24の国と地域に広がり、参加校は2600校を超えている。



ミンダナオ島で生活する池田さん夫妻



植林活動の中心になっている「子供の森」プロジェクト

「残念ながら、大人に植林の意味を懸命に訴えても、『いずれ伐採して生活費を得よう』という考え方から抜け切れない人が多い。その点、子どもたちは世俗的な考え方に染まっていない。森の大切さを植林活動を通じて体で実感した子どもたちが大人になったとき、地球に再び緑の大地が復活すると思う。子どもたちこそ希望です」

現地の子どもたちに「タイ(お父さん)」の愛称で呼ばれている池田さんの胸は今、若い世代への期待に膨らんでいる。

いけだ・ひろし/1942年、福岡県生まれ。福岡商業高校卒業後、西日本相互銀行(現西日本銀行)に入社。71年にオイスカの開発団員としてフィリピン・ミンダナオ島に赴任。農業技術の指導にあたりとともに植林活動を展開。現在、オイスカ・ミンダナオ・エコテック国際学校所長。家族は妻との間に2男1女。現在、ミンダナオ島で養女と妻との3人暮らし。長男と次男はアジアでオイスカの団員として活動中で、長女はマニラの大学の医学部に通っている。

